

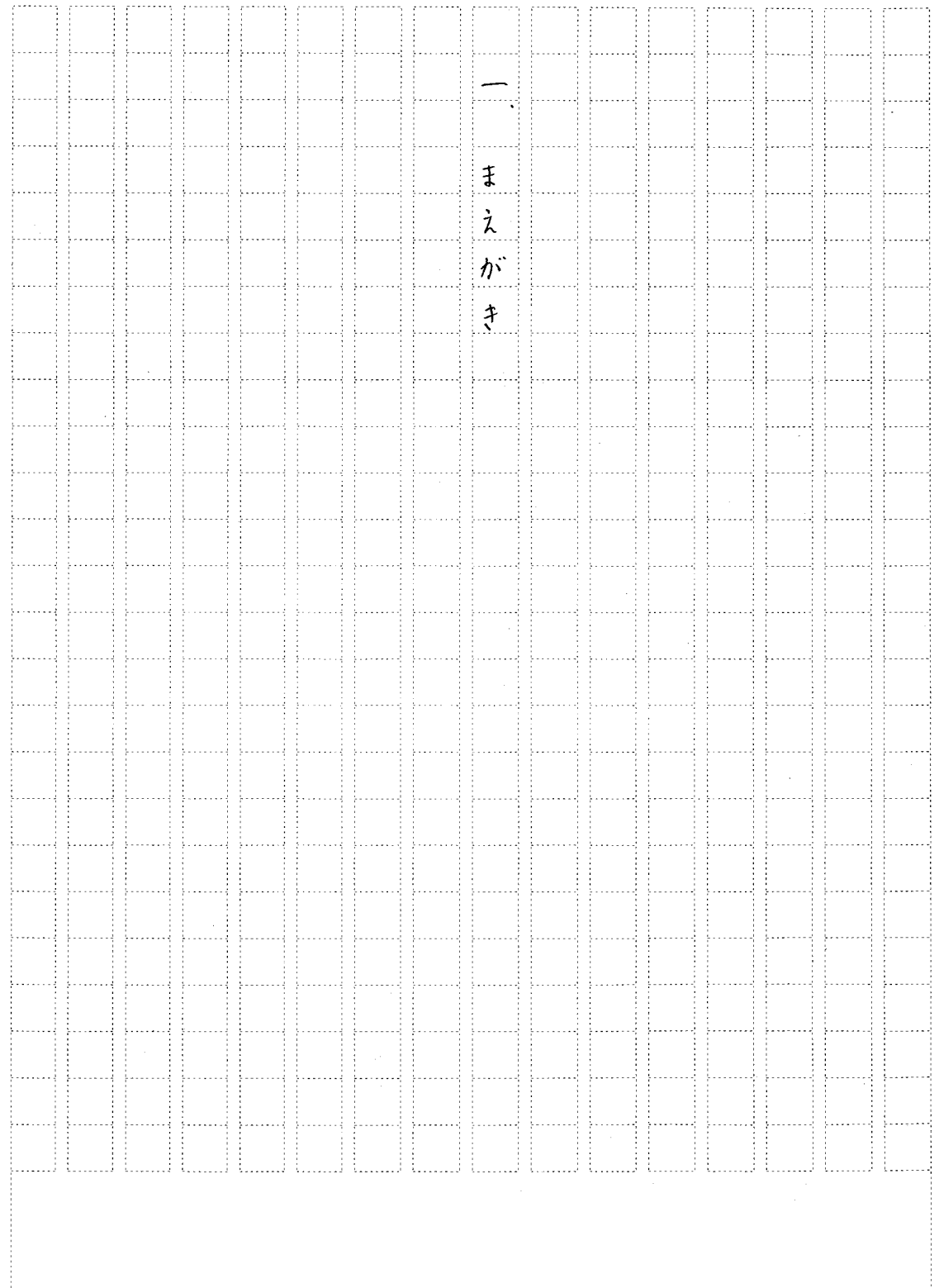
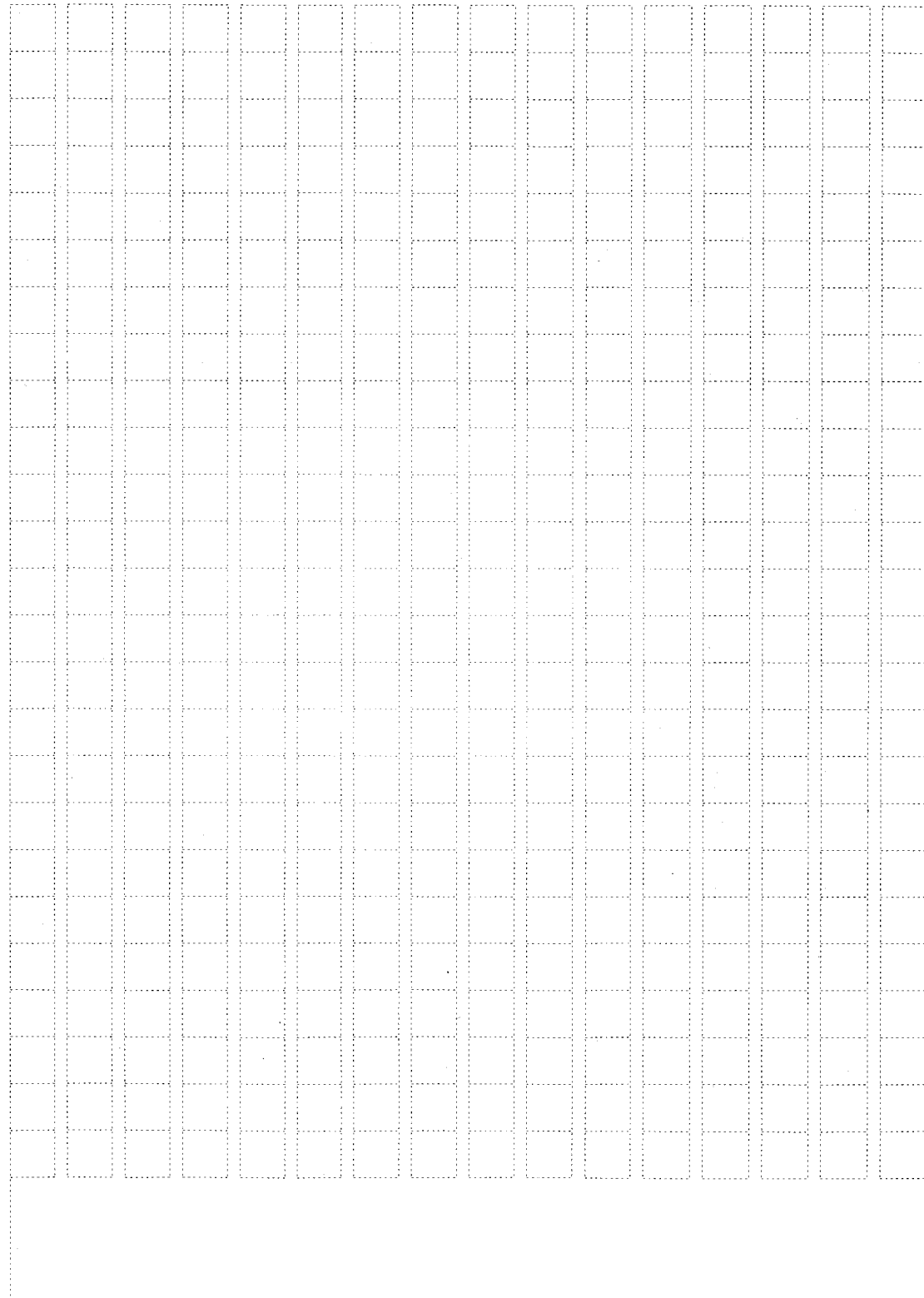
国木田独歩における宗教と文学

兵庫教育大学大学院教科領域教育

言語系コース M八二二〇二

石井正史

一	まえがき	2頁
二	独歩の驚異心と宗教	14頁
三	独歩の悲哀感と宗教	48頁
四	独歩の「詩」	62頁



一  
まえがき

えぬ人々も論他<sup>(3)</sup>の序章で先ず作家島尾敏雄の文章を引いて、いるが、その中心点は次のとおりである。『しかし、この言い切つてしまつただけでは彼の作品から受けるみずみずしい肝銘とその生命の長さを説明することが出来ません。彼の作品が、いつまでもその魅力を失わず、むしろ時がたつに従つて新鮮な度合いを増すのではないかと思われることは、何か不思議な感じであり、ます。』これに引續いて北野氏は、『独歩の影響で文学に開眼した人、あるいは独歩に強い関心をいたしたことのある人は、明治・大正・昭和の文壇・詩壇・歌壇・俳壇に数多く見うけられる。』として、著名な人を『出世順』に約六十名挙げて、いるのである。その中には学者、評論家も含まれるが、この壯観な氏名の列挙を前にして、その人達それぞれがまた幾人もの『弟子』を持つて、いることにも思いを致すと現在私たちも独歩のまいた種を刈りとりつて、いるとさえ思えてくるのである。

第一 まえがき

国木田独歩の作品について論じる時、宗教の人独歩を、その宗教性を問われないならば常に隔靴搔痒の論に終るか、的外れ並びに拡大解釈に陥るといふのが筆者の立場である。読む者に新鮮な印象を残し何やらバの渴きを癒してくれるような不思議なものがあつて、それは文学史的な価値とは一応別な、魅力として今日の論者にも認められて、いるところである。曰く、『独歩の小説はいずれも短編である。しかし、真珠の玉のように光るものが多い。なんべん読んでも新鮮な印象を受けるもの、さまざまの問題意識を呼び込まれるもの、詩的味わいの深いものなど、いろいろある。』<sup>(1)</sup> 曰く、『独歩は、いつの時代に、も読まざるべき作家である。』<sup>(2)</sup> 曰く、『今日ほどに、独歩を必要とする時代はない。』云々<sup>(2)</sup> もう一例挙げると、北野昭彦氏はその著『国木田独歩』<sup>(2)</sup> 忘れ

仕方<sup>L(6)</sup>を観察し、宗教における超感覚的超自然的事実を信じることはできない。この「外的啓示<sup>L(7)</sup>」は信徒の内的啓示<sup>L(8)</sup>とともにおそらく人間の認識能力として生得的、普遍的な「各人が持ち得る<sup>L</sup>」呼び起こされる「感受する能力と価値判断の原理<sup>L</sup>」に拠つているのである。(8)

同じことをW・ジエームスは心理学的実在物である「潜在意識的自己<sup>L</sup>」「神秘的領域<sup>L</sup>」と呼び、全て理想的な衝動はここに由来していと述べている。(9)

念される事実は感覚にあらわれるそれと同じ強さか、より以上に強い反応を来たらすのである。(「諸相<sup>L(下)</sup>」)

十一・十二・十三講(84p)「更にW・ジエームス、R・オットーに共通するのはこの「アパリアリな素質、領域に特に恵まれた人とそうでない人との区別、段階を認め、いる点、(崇拜する神々や救世主の姿を感覚的に見た人は例外的少数の信徒のみである)及びその発生、起源は説明できずその意義を問題とするという点である。

しかし、遺憾ながら独歩文学の特質が「驚異心<sup>L</sup>」に代表される彼の信仰への希求にその源を求めべきであることは本格的に顧みられていない。「驚異の哲学<sup>L</sup>」と呼ばれる独歩の神秘的形而上学は「私たうはこのことをほとんど忘れてしまつた<sup>L</sup>」「言い難いもの<sup>L</sup>」を「神秘主義はむしろ沈黙主義でない故に——表出せんがため」の「多弁<sup>L(4)</sup>」として、どの作品にもその根源、いわば魂として在ることとを筆者は述べてゆきたい。ただ筆者はある宗教の信者という意味での信仰体験はない。したがって国木田独歩が「正統的な<sup>L</sup>」キリスト教信者であつたか否かを問うことはできない。もつとも後に述べるであろう如く何が正統かは一概に言えないし、独歩自身暗に提出して「いる問題でもあつた。確かに筆者においては信徒の「内的啓示<sup>L(5)</sup>」よりする立場は捨てねばならない。が、特別な出来事や人物や内的啓示の存すること及びそれらの現実への「果実<sup>L</sup>」——「信仰が全体に働きを及ぼすその

もよい。と論じている。(13) すなわち、外的なもの  
 拒絶した。た神の言葉によつてのみ生きる。「内的人間」へ  
 ルタト」によつてはじめ近代の自我なるものが見出し  
 され、一神教への転回によつて自然はただの自然として  
 實在の風景が対象として見えにくると言うのである。例  
 えば独歩の自然観について汎神論的であるとはよく言わ  
 れることだが、仮にもしそうだとしても、それはもはや  
 在来の多神論とは異なっている。いわば一神教の裏返し  
 であつて、キリスト教の介在を今日の私たちは忘れがち  
 である。この「自明性」(柄谷行人)に注意すること、  
 一種のねじれ、二重性を見ること、が、教壇で現代国語の  
 授業をすすめる時重要であらう。独歩において象徴的に露わ  
 れたこの問題は、一般に近代文学、評論の自我や自然に  
 たいする読解の複雑性、難解さに国語教師を直面させる  
 ずだからである。(14)

(10) さて日本の近代文学はキリスト教——一神教との出会  
 いといふ。「精神上の大革命」(11)を抜きにしては語りえな  
 いであらう。何か決定的な転回が起っているのである。  
 中村光夫氏は「明治文学史」で明治十年代の自由民権運  
 動と政治小説に關して次のように言う。「ここにやがて  
 出現する実利と出世主義の支配する軍国主義に対して、  
 自由と民権の幻は、維新の気風をうけついで青年たちが  
 生命をかけるに足ると信じた最後の理想であつたので、  
 それが失われたのち、消しがたい形で残された精神的空  
 白は、やがて政治小説とほまつた人達つた形で、表現の  
 形を見出し出しました。(12) これを踏まえて柄谷行人氏  
 は、「フロイト流にいえば、政治小説または自由民権運  
 動にふりむけられていたリビド」がその対象をうしなつ  
 て内向した時、「内面」や「風景」が出現したといつて

更にジエームスは次のように述べている。「なぜ私が宗教における感情の要素の名誉を回復し、宗教の知的な部分を軽視することばかりにあれば、熱中しているように見えただか、おわかりのことであらう。個性は感情に基づいている。そして感情の奥底、すなわち性格のより暗くより盲目的な層こそ、私たちが真の事実の生成過程をとらえ、事実がどのようなにしてなされるかを直接に知覚する、世界における唯一の場所なのである。」(同342p.)

「意識的人格は救いの経験をもたらし、世界に於いて自己と連続している、という事実こそ、宗教的経験に関する限り、文字どおり客観的に真である。私に思われる宗教的経験の積極的内容をなすものである。」(同382p.)

「私たちの現在の意識の世界は、存在している多くの意識の世界の一つに

注(1) 山田博光 「独歩」 河霧 論 (一) 日本文学論叢攷

昭和四十三年八月。このころは「日本文学研究資料」

叢書 自然主義文学 有精堂 所収に拠る。

(2) 本間久雄 「今日こそ独歩必要の時代」へ「学習研究社」定本 国木田独歩全集別巻 昭和四十一年九月

(3) 昭和五十六年一月 桜楓社

(4) ルドルフ・オットー 「聖なるもの」 第四章 43p.

第一章 11p. (山谷省吾訳 岩波文庫 昭和四十三年十二月。)

(5) 「聖なるもの」 第二〇章 225p.

(6) ウィリアム・ジエームス 「宗教的経験の諸相」(上) 第一講 38p. (柳田啓三郎訳 岩波文庫 昭和四十四年十月。)

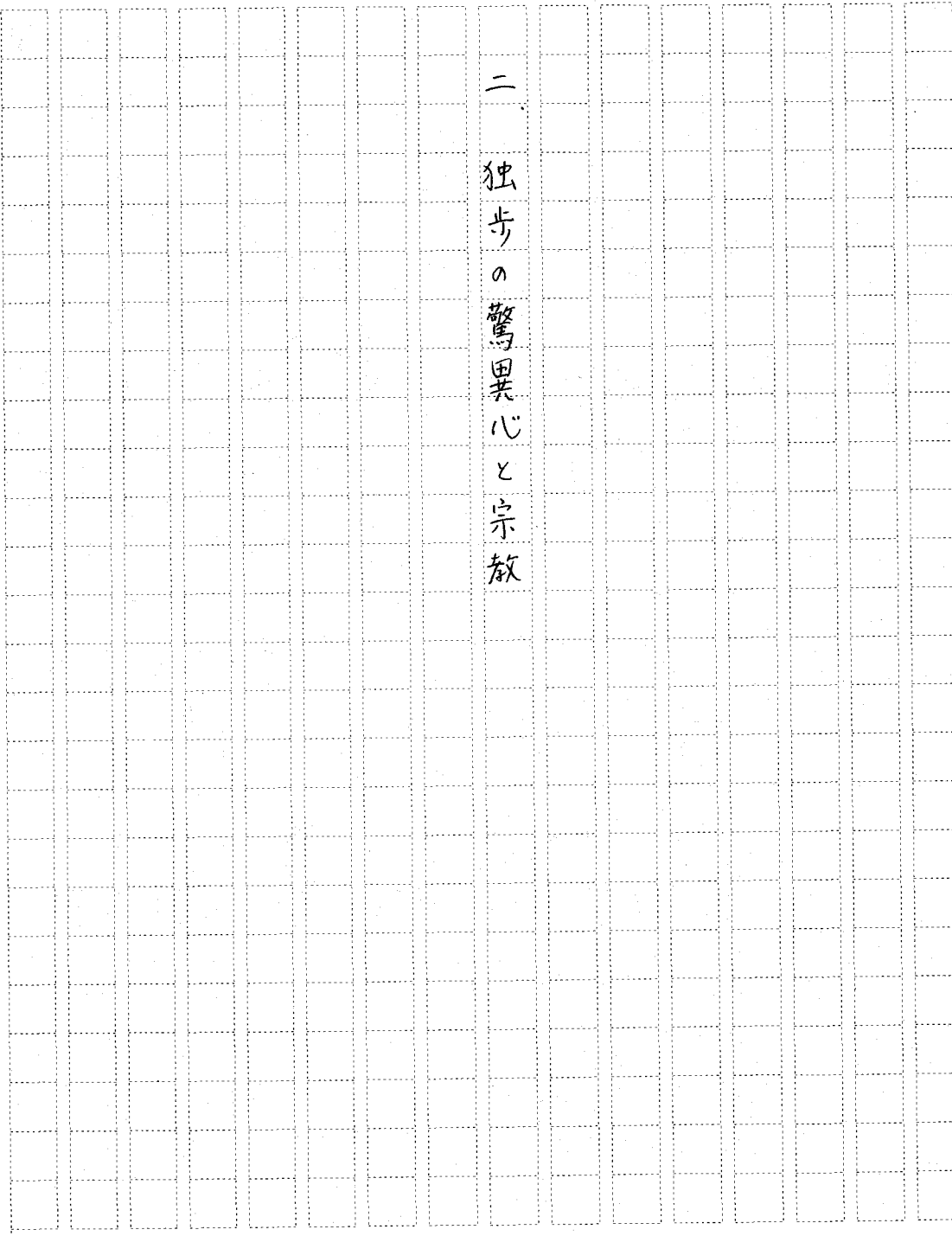
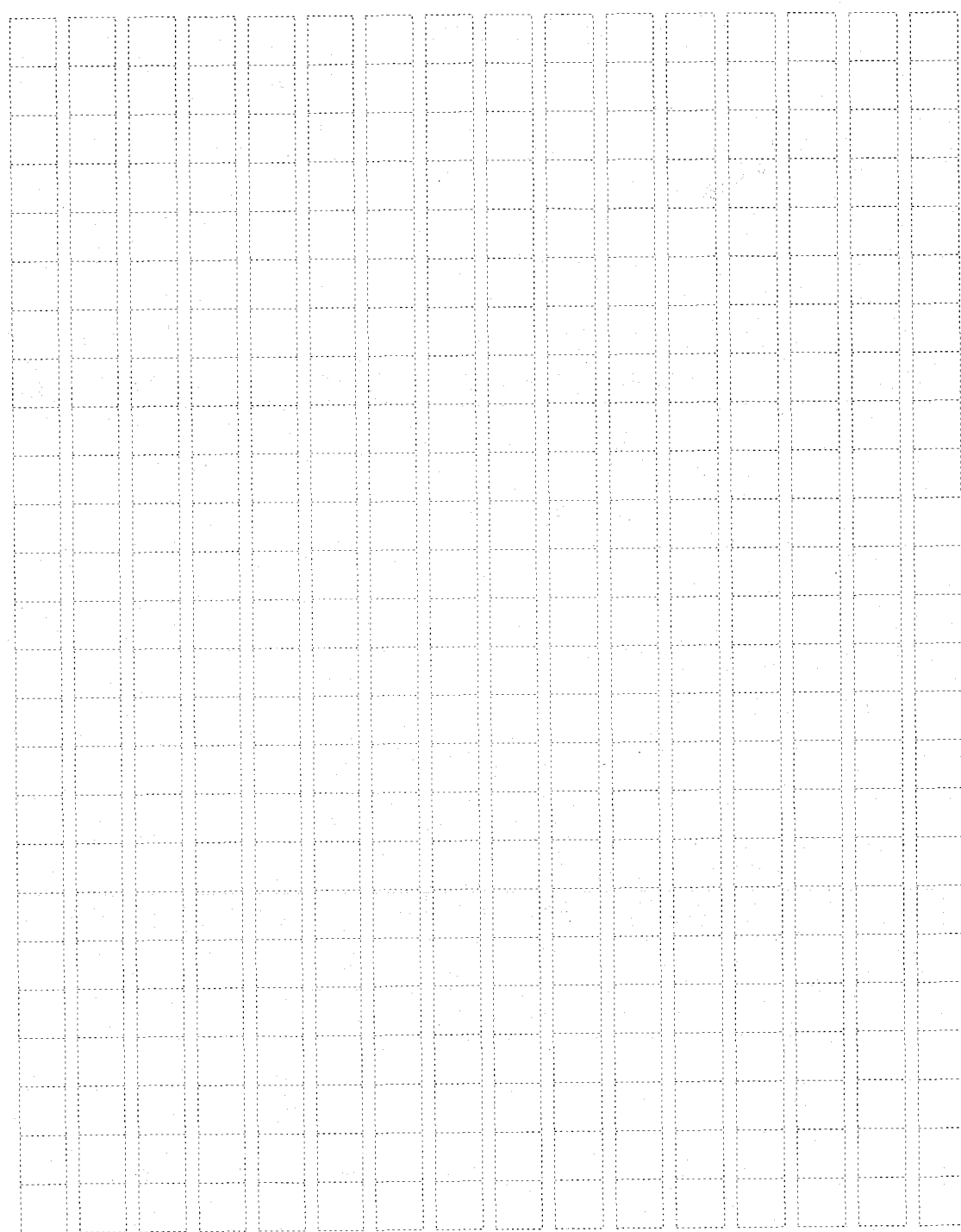
以下「諸相」と略記する。

(7) 「聖なるもの」 第二〇章 225p.

(8) 「聖なるもの」 第二三章 266p.

(9) 「諸相」(F) 昭和四十五年二月。第二〇講 376、383p.





二 独歩の驚異心と宗教



て、生徒や友人等にも大分宗教の話しを聞かして居たといふことだ。現にその頃君の手で導かれた信者の一人が今私の教会にも居る。マアその頃は熱心であつたというてよからう。然しそれから色々世の中、波に揉まれ、苦い経験を嘗めて信仰も何だか曖昧になつたやうに見えた。

先ずここまでの記述は(B)もほぼ同様、大同小異である。ただこの次に(B)の方には、その後(佐伯の教師時代)明治二十六年九月三十日(二十七年八月一日の後。筆者注)何でも一番町あたりに住んで居た。そして程なく国民新聞社へ這入つたやうだ。その頃は総てが基督教的で、まだ信仰もあつたやうに思はれる。その条リがある。そして、中略して(A)を見ると次のようである。で死といふ実問題と直前相面した時、極言すれば狼狽した形があつたかとも思はれる。

勿論是は私が只然う思ふだけで、事実果して然う

第二 独歩の驚異心と宗教

独歩 国木田哲夫は明治二十四年一月四日(数え歳二十一歳)東京麹町区の一番町教会でその牧師植村正久によつて洗礼を受けた。(1) その植村正久が、独歩没直後に文芸誌四誌が相ついで追悼特集を組み後代の雑誌特集号の原型になつたと言われているがその(2) 二つの文芸誌にそれぞれ回想文を寄せた。『信仰上の独歩』、『新潮』

明治四十一年七月——と『教会時代の独歩』——趣味

明治四十一年八月——と『前者を(A)後者を(B)とする。』

まず(A)をみると次のようである。

国木田君は明治二十三年頃、未だ早稲田専門学校在学時代に学友の田村三治君などと一緒に私の手

で洗礼を受けた。教会はその頃一番町教会といふのであつたが、今は無い。その間格別云ふこともないやうだ。豊後の佐伯に行つてからも信仰は持つて居

持つて居るのほ神だから神様に祈らなくてはならぬ  
 と話した。けれども何うしても同君は祈ることが出  
 来ないと云つて泣かれた。  
 同君が死なれる前、弟収二君に對して「死は彼岸  
 に達する努力なり」と言つたとか聞いて居る。これ  
 は私が同君に會つた時、話した事であるから、或は  
 信仰に進むで死なれたのではないかと内心喜んで  
 る。自分で意識しなかつたかも知れないが、暗々裡  
 に思めい寵まれて居たのであらうと思はれる。(2)  
 以上長く引用したのほ独歩の信仰の外観が簡略に見渡せ  
 る証言だからである。しかし更には、発表に於いて一  
 月の違ひがあるだけの兩証言で結論が正反対なのである。  
 そこでは今度は独歩の「病牀録」を見よう。「病牀録」  
 は真山彬（青果）編の談話筆記で独歩没後三週間の明治  
 四十一年七月十五日刊である。

であつたか如何かは知らぬ。然し弟収二君に對し  
 て「死は彼岸に達する努力なり」と言つたとか聞いて  
 居る。これは私が同君に説いてやつたことゝ殆ど  
 一致して居るから、或は信仰を得て死んだのぢやな  
 いか知らんと私も内心嬉しい次第であるが、然しそ  
 の後に猶煩悶が続いたといふから或は然うでなかつ  
 たかも知れん。何しろ私は單にその経路だけ示され  
 て、その帰結を見ないのであるから、国木田君が最  
 後に於ける信念の有無の奈何を覗ふことが出来ぬ。  
 然し大体に於いて信仰は無かつたと言つて宜からう  
 と思ふ。  
 これに對して(B)は次のようになつてゐる。  
 それから今度の病氣である、私が茅ヶ崎へ行つて  
 見ると、同君は私に「貴方は私の信仰を開く相鍵を  
 持つて居るから、私を救つて呉れ」と云はれた。然  
 し私はその時、「私は相鍵を持つて居ない、相鍵を

臨終に先立つ事五六日、(直前の引用からは約一ヶ月後、  
 六月十七、八月となる。筆者注) 一朝、愛弟収二君を  
 枕辺に招きて斯くの如く云ふ。云々  
 これが今問題の個所である。様々に紛飾、修飾をもって  
 論じられ描かれる場面でもあるが、原典たる病牀録はこ  
 のような簡単な記述である。しかしこれが劇的な場面と  
 して語りれること自体、人間の宗教的神秘性、すなわち  
 それに特に恵まれた者はすでに預言者であるところのあ  
 の根源的感応能力、潜在的領域の實在をみかしていよう。  
 R. オットーは「聖なるもの」第十九章でルターの「卓  
 上談話」を引いている。「凡ての人間精神は、神から神  
 の知識が印せられている。だから、すべての異邦人  
 は、神がないと主張しようとしても、神の存在を知  
 っている。丁度、この拒否そのものの中に、神の在るこ  
 とを告白しているではないか。だれしも実際彼の知らな  
 いことを拒否し得ないから。だから、神の存在を

心の合鍵は渠の手にあり。故に余はその鍵を以つて、  
 今の余の煩悶より救はれんとせり。生死の境に迷へ  
 る余の心は、氏の導きに依つて初めて救はる可しと  
 信じたり。／＼氏は唯禱れと云ふ。禱れば一切の事  
 解決すべしと云ふ。極めて容易なる事なり。／＼然  
 れども、余は禱ること能はず、衷心に湧かざる祈禱  
 は主も容れ給はざらん。禱の文句は極めて簡易なれ  
 ど、禱の心は難し、得難し。／＼誰か来りて、この  
 禱り得ぬ心を救はず。余は衷心より禱を捧ぐるを  
 得ば、その時直ちに救はれ得可きを信ず。  
 五月十九日、午後三時、独歩氏病牀に泣く。  
 余は昨夜翻然として悟れり。／＼曰く、生や素よ  
 り好し、されど死亦悪しからず。疾病は彼岸に到達  
 する階段のみ、順序のみ。又吾生の一有事たりと稽  
 ふれば、別に煩悶するを要せず。

証明し肯定する良心を、心情外に駆逐することはできない。  
 後に述べるように独歩は天地間の不思議に驚異すると  
 いう体験で「神のような対象」(3)と直面していることは  
 彼のその他数々の断片的ことばを考慮に入れても明らか  
 である。合理的と呼ばれる意識以外の恐らくもつと広大  
 な隠れた意識——心情内の靈的認識力——が受け入れか  
 つ認知するところの、それは「事実」である。R. オ  
 トーの言うように「聖なるもの」(第二〇章)「驚異とは  
 すなわち「徴」である。啓示において聖なるものの感情  
 を刺激し呼び醒すありゆるものを「宗教の用語では「徴  
 と言うが、徴にいつたん出会った者は預言者のな預覚と  
 認識を得たのである。「預覚の能力」を心内に経験した  
 者にとつて、或る現前の意識(神と呼んでもよい)は事  
 実にほかなりず、預覚能力の根本性格上、合理的な領域  
 | 悟性と感覚の力によつてこれから離れ去ることほど

きない。天地間の感応に身をおくことであり、アパリ  
 リに与えられ恵まれていゝものだからである。独歩の二  
 度目の妻治子夫人は自分達の結婚前のことを回想した中  
 で「国木田もその頃は、キリスト教はお休みでした」(一  
 明治三十年十一月頃)とか語つたそうだが、上の観点か  
 らこのお休みということは却つて意味深く思われるの  
 である。(4)

願  
 いをいくつが例示してけよう。  
 作品にあらわれた独歩の驚異体験及び驚きたいとい  
 う  
 ところ、昨夜のことであつた。私はフト真夜中  
 に眼が覚めた。夢も見ない熟睡の中から覚めた。一  
 室は仄暗く、あたりは森としていゝ。此時、私の心  
 に雷のやうに閃いて来た一(ひと)の思想があつた。思想と  
 いはうか、感情といはうか、将た現象と言はうか、

聞に閃めく電光が忽然として又闇に消えて了うやう  
 に、私は再びこれを呼び返さうと力めて見たがため  
 であつた。  
 しかしながら此時私は泌々しみと感かじた。ア、人  
 間とは不思議なものである。生命とは不思議なもの  
 である。  
 (「悪魔」明治36年5月)  
 「私は天地生存の感に堪ないので泣きました。  
 「何時でも其感に堪ないかね？」  
 「何時でもでは御座いません、時々御座ます。け  
 れど其時々いんたぎまの感は恰も電のやうに小子わたくしの心を射るの  
 で御座います。  
 「そしてお前は其電光に照して日常の生活の暗黒を  
 見るだらう。そしてお前は何時も此電光の中に住んで  
 居たく思ふだらう。」

心理学者の分類するところの知情意の何れに層すべ  
 きものたるを私は知らない。  
 「ア、不思議！此処は何処だ、宇宙だ、自分此  
 大宇宙の一部だ、生命よ、生命よ、此生命は此宇  
 宙の呼吸である。」  
 たゞ斯う言へば言葉の連続に過ぎないが然し、私  
 の感じたことは到底如何なる言葉を以てしても現は  
 すことが出来ない。此畏ろしき此の現象が閃いた時、  
 其時実に私自身の存在を感じたのである。世間に於  
 ける自己ではない、利害得喪、是非善悪の為めに此  
 を悩ます自己ではない、文学とか宗教とか政治とか、  
 はた倫理とかいふ題目に思を焦す自己ではない、又  
 た親子の愛、男女なんにょの恋に熱き涙を流す自己でもない、又  
 た、夫れ一個の生物たる我の存在、此宇宙における  
 存在を感じたのである。  
 然し忽ちにして此此の現象は消えて了つた、恰度

地における此我て小もの、如何にも不思議なることを痛感して自然に発したる心霊の叫である。此間其物が心霊の真面目なる声である。これを嘲るのは其心霊の麻痺を自状するのである。僕の願は寧ろ、如何にかして此問を心から発したいのであります。我何処より来り、我何処にか往く、よく言う言葉であるが、矢張り此問を發せざらんと欲して發せざるを得ない人の心から宗教の泉は流れ出るので、詩でもさうです。だから其以外は悉く遊戯です虚偽です。もう止ましよう！無益です、いくら言つても無益です。ア、疲労た！しかし最後に一言しますね、僕は人間を二種に區別したい、曰く驚人人、曰く平気な人……。

(「牛肉と馬鈴薯」明治三十四年十一月)

「喫驚したいといふのが僕の願なんです。」

「さうじ御座います。若し私を此光に導いて呉れるものがあるなら、それこそ私の神で御座います。」

「翁は此言葉を聞いて微笑し、

「まづお前に聞きたいのはお前が時々打たれるといふ其電の模様だ、それを詳しく話してお呉れ。」

「刹那の感で御座いますから一口で申されます。或夜のことでした。真夜中にふと眼が覚めました。夜は更け万籟寂として居ました。私は眼を開いて床の上には身動きもして居ませんでした。其時です、私は卒然我生命の此大いなる、此無限無窮なる宇宙に現存して居るのを感じたのです。そして言ふべからざる畏懼の念に打たれたので御座います。」

(「神の子」明治三十五年十二月十五日)

「吾とは何ぞや(と云ふ)……此問は必ずしも其答を求むるが為めに発した問ではない。実に此天

ことばはその際指示するのみで文字が理解されるために  
 きものだが、悟性的知識、認識とは違つた認識であり、  
 い難いもの——非合理的非概念で、結局感情内容に帰すべ  
 これを要するに、独歩の思想、感情が心霊から発した言  
 情のうちにあらんことなり。  
 (「岡本の手帳」明治三十九年六月)  
 感情にして永続せず。わが願は絶えず此強き深き感  
 星を仰ぎたる時など、時には驚異の念に打たるゝ事  
 あるは人々の経験する処なり。されどこはしばしの  
 ぐみなり。友人の死したる時など、独り蒼天の  
 つゝあり。これを感じ得たるはまことに神のめ  
 われはわが心の眼に厚き膜の覆ひ居ることを感じ  
 りしき事実を痛感せんことなり。  
 も安んずる能はざる程に此宇宙人生の有のまゝの恐  
 信仰を得んことに非ず、信仰なくんば片時たりと

てみる。  
 抜き書きといふ形で発表された「岡本の手帳」から挙げ  
 もう一つ、「牛肉と馬鈴薯」の主人岡本誠夫の手帳の  
 書いたのが僕の願です！  
 (「牛肉と馬鈴薯」)  
 寧ろ此使用ひ古るした葡萄のやうな眼球を宛り出  
 人生の秘義に悩まされんことが僕の願であります。  
 必すしも信仰そのものは僕の願ではない、信仰な  
 死の秘密を知りたいといふ願ではない、死て不事  
 議なる宇宙を驚きたいといふ願です！  
 突然驚きたいといふ願です！  
 必すしも信仰そのものは僕の願ではない、信仰な  
 として片時たりとも安んずる能はざるほどに此宇宙  
 人生の秘義に悩まされんことが僕の願であります。  
 寧ろ此使用ひ古るした葡萄のやうな眼球を宛り出  
 書いたのが僕の願です！  
 (「牛肉と馬鈴薯」)



現前の事実を書いた「見神の実験」(明治三十八年五月)  
 で知られる網島梁川は、「天地驚くべし、天地に驚く我  
 は更に驚くべし。而して我に驚く我は更に又驚くべし。  
 かくて吾人が我に驚く深さに際限あざべからず。(8)と  
 述べたが、独歩は後自分の小説集「独歩集」を彼に送っ  
 ている。(9) この驚異心ありて後宗教ありという思想、  
 直観は独歩の次のことばによく表われている。  
 宗教とは宇宙人王の不思議を解釈せんがために起り  
 しにはあらず。不思議を不思議と痛感して後起る処  
 の信仰に由つて成るものなり。神の人は言ふも  
 畏し、ポーロヤルテルヤ、皆な「不思議」にめさ  
 めて此幽遠宏大なる宇宙に於ける人の命運につき心  
 をのき感あふれしなり。其火の如き信仰は止むこ  
 とを得ずして起りし結果なり。

(「岡本の手帳」)

独歩のこの痛切な確信は「悪魔」「牛肉と馬鈴薯」と

その後幾度も襲ったようである。(4) この「一閃の光」は  
 治二十七年六月十二日の条を見るとこの天来の「大インスピ  
 に推測されるが(二十六年二月二十一日の条参照)、明  
 シヨンは明治二十五年十月頃最初に得たもののよう  
 のことばに込めているのである。(6) 驚きたいと  
 「欺かざるの記」を見るとこの天来の「大インスピ  
 いという二律背反のもしかしさを独歩は「驚きたい」と  
 めには経験、感情がすでに所持されていなければならな  
 うる限りでは述べることができずが、一方理解されるた  
 らぬと何らかの準備が知らずなされていったことが、神のめ  
 ると消え去りして、時に急に忍び寄つてきて心を満たしもし  
 また消え去りやすいためであること。(5) またつけ加え  
 き去りにして、時に急に忍び寄つてきて心を満たしもし  
 感を引き起こすところのおそれを伴い、平板な信仰をお  
 うことになる。更には驚きまたは不思議の感情は被造者  
 はすでにその感情内容が所持されている必要があるとい



命其ものを此宇宙のうち痛感することなくしては生命  
 の疑問起らざれば也。レ「欺かざるの記」明治二十七  
 年六月二十一日」といふ彼の自問自答の答えを不問に付  
 すことほびきない。更にここで「岡本の手帳」独  
 歩が汎神論からは遠いところにいることがわかる。汎神  
 論が世界を解釈せんところからくる世界観を意味する限  
 りにおいてそれは独歩の信仰とも、一般に宗教とも縁遠  
 いからである。

さて「牛肉と馬鈴薯」の結末はこうなっている。

「イヤ僕も喫驚したと言ふけれど、矢張り単にさ  
 う言ふだけですよハ、ハ、ハ、ハ」

「矢張り道楽びさアハツハツ、ハツ、ハツ、岡本は一所に  
 笑つたが、近藤は岡本の顔に言ふ可からざる苦痛の  
 色を見て取つた。」

もに暗に当時のキリスト教会のあり方(10)に對する批判と  
 密接につながつていよう。ルターの信仰に對してはR.  
 オットーの次のことばに耳を傾けよう。「被造物自身  
 その「蔽われない」被造物性において戦慄する神である。  
 ルターは神におけるこの恐るべき非合理的なものを神自  
 身と呼ぶことさえ敢てした。「信仰はルターにとつては  
 常にかつ最後まで、驚異と神秘とに對する関係であり、  
 また同時に人間を神と一つならしめる、秘密な靈魂の  
 カである。」(11) W. ジェイムスも次のように言う。「  
 しかしこの講義では、教会制度はまったく私たちの問題  
 とはならない。この種の直接的な個人経験は、その  
 誕生を目撃した人々の目には、いつでも一種の異端的な  
 革新として映つた。」(12) 何が正統的かという問題の解答  
 は単純にはいかないと云わざるをえないのである。少く  
 とも、「信仰とは只だ生命の疑問の結果なればなり。生

験自身からはつけ難いからである。(14)

主人公岡本のこの苦渋は第一には自分の経験が厳密には語り伝えることができないところからくる。第二には驚きを自己の経験事実としては解し得ないが間接的経験として信じてようとする人間を近藤によつて描き出してゐるのである。驚く人」と「平気な人」の「二種」いずれにも属せず中間に立つが、「驚く人」の方に身を寄せたい人物である。(作中近藤は牛肉党——現実派でも馬鈴薯党——理想派でもないと言う男となつてゐる。)岡本の顔を最後近藤だけが見ていたことをもつて、岡本が近藤により相対化されてゐる等の論は皮相な見方と言わざるをえない。(13) ただ「悪魔」になると題名が雄弁にもの語つてゐる如く、確かにそのような自己相対化の視点、異端者意識が入つてゐる。この小説は孤独な信仰者の思想、行動、告白が縦軸となつてゐるが、驚異の神秘体験における理想的な衝動と悪魔的なそれとの区別は体

(4) 独歩「一句一節一章録」(全集第九卷)。  
 なお同作品で、同じ時期三十年十一月十一日の条に「自分はどうしても日曜は教会に行かなければ此命がもてない。自分は神なくしては生き難い事をつくづく感ずる。」とある。「一句一節一章録」は没後明治四十一年八月に発表された遺稿で、後「恋の日記」と改題された日記体の作品。(5) 以上はオットー「聖なるもの」を下敷にしているが(主に第四章)、一方波多野精一氏は神秘主義について次のように述べている。「この世界がそれのありとありとしかありとを、その存在と全き内容とを、提げて無に帰するといふ体験は、純真なるなる宗教には欠くことのできぬ特徴である。宗教の対象はそれの主体に、つては聖なるもの・全く他なるもの・全然超越的なるもの・不可思議なるものである故、それとの生の共同従

注(1) パロテスタントの三源流の一つ横浜バンドの人である。そして独歩は植村の「外国文学教育」の影響も大きいのだが、辻橋三郎氏は「国民之友」の「徳富蘇峰に親炙していた故をもつて独歩を熊本バインド系の中に入れていた故をもつて近代文学者とキリスト教思想」5、6P。昭和十四年六月桜楓社)「信仰上の独歩」教会時代の独歩にも学習研究社「定本国木田独歩全集第十卷(昭和四十二年九月)所収に拠った。」  
 「諸相」(上)第二講56、63P。「私たちが宗教を定義して、個人と「彼が神とみなすもの」との関係」というとき、具体的な神であるか否かにかかわらず、何であれ神のような対象を指すものと考えねばならない。「宗教は」一線を画せるような概念など一つも存在しないような経験領域なのだ、

生命の生命はソールなり、ソール則ち生命の自覚  
 なり。吾がソールを信ず。然りソール之れを  
 命す。否、ソールかく言ふ。(同上十七日)  
 「現象は幻なり、吾が魂は實にしか感ず。幻は真  
 の影なり。真の神は凡てなり。(二十七年七月  
 十四日) 吾は此生命の持主にして吾とは此の  
 独立の靈にあらすや。神の前に在りて独立の星に  
 ありすや。自由と義務の外に吾を神の前に辱  
 しめざるものほありじ。(二十七年十月三日)  
 「時間、空間、名称、習慣のイルージョン、  
 (二十七年七月二日)  
 なお「欺かざるの記」は、明治二十六年二月四  
 日から三十年五月十八日まで日記。その殆んど  
 全部が死後まもなく田山花袋ら友人三人の校訂に  
 より出版された。本人にその意向があつたと言わ  
 れる。その文学性は塩田良平氏らによつてつとに

つて直接性も、それ自らとしてほ、あり得べから  
 ざるもの、あらゆる理解を超越するものでなけれ  
 ばならぬ。それは實に宗教における最大の驚異・  
 秘密、驚異・秘密そのものであり、あらゆる特殊  
 の驚異秘密の発源地である。この意味においてそ  
 れはまた、宗教的体験における「非合理的契  
 機」と名づけ得るであらう。(「宗教哲学」第  
 三章 108、116 p. 昭和十年四月。)  
 「欺かざるの記」には次のような記事が見える。  
 「生命宇宙に周流し大神無窮に統整す、吾の  
 立場はこれのみ。地上は幻と称するものなり  
 更に真実なるものは靈界なり。(明治二十七年  
 六月四日) 人類的主観は人間の希望、信仰  
 生命、法則なり。人類的主観をほなれて宗教  
 哲学、詩歌なし。近代の妄想」とは要する  
 に人類の客観の幻なり。(同上八日) 然り

窮の天地の間に在るの不思議に撞著したことを  
 また、驚異心の発端として幼い頃路傍の石の「無  
 は直識、直覚、自證、面接であるとも述べている。  
 べる。同じく、現実が「超絶」となる偉大な事実  
 習慣、伝説、制度、その他一切の偶像權威だと述  
 の中で梁川は、明や聡をふさぐのは文明、祖師、  
 「驚異と宗教」(明治三十八年五月) この文章  
 を覚ゆ云々」  
 「山林に自由存す」われ此句を吟じて血のわく  
 歩の有名な詩「山林に自由存す」である。曰く、  
 たことが載せてある(186p.)。思いつくのは独  
 か森林とかその他二、三の語にそのように反応し  
 る。その実例としてジョン・フォスターは木々と  
 力強い感情を生み出すことがあるという報告であ  
 何か特定の言葉に異常に魅せられまたそれが最も  
 何れち神秘的経験の最も単純な階梯の特徴として、  
 なる。その実例としてジョン・フォスターは木々と  
 力強い感情を生み出すことがあるという報告であ  
 何か特定の言葉に異常に魅せられまたそれが最も

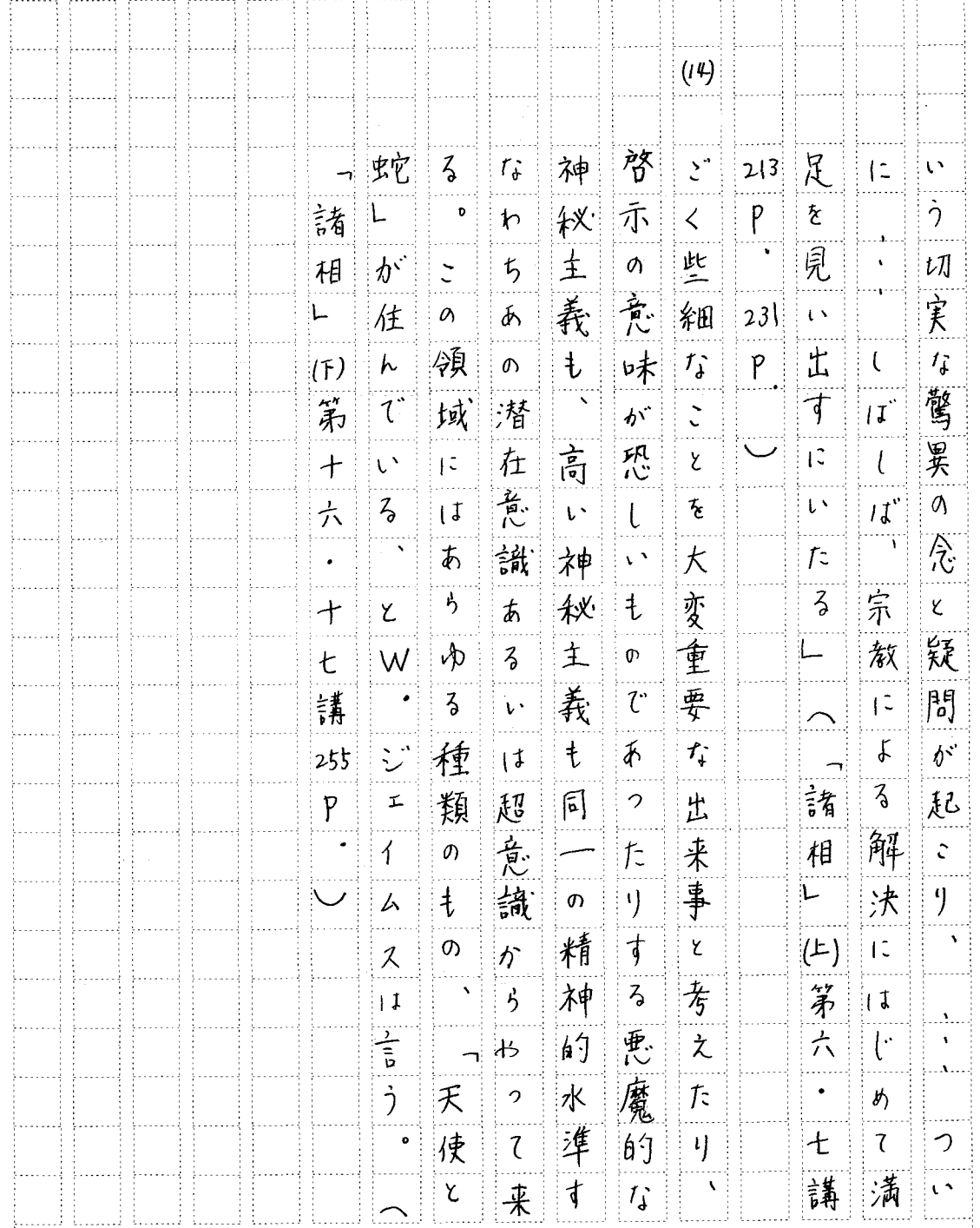
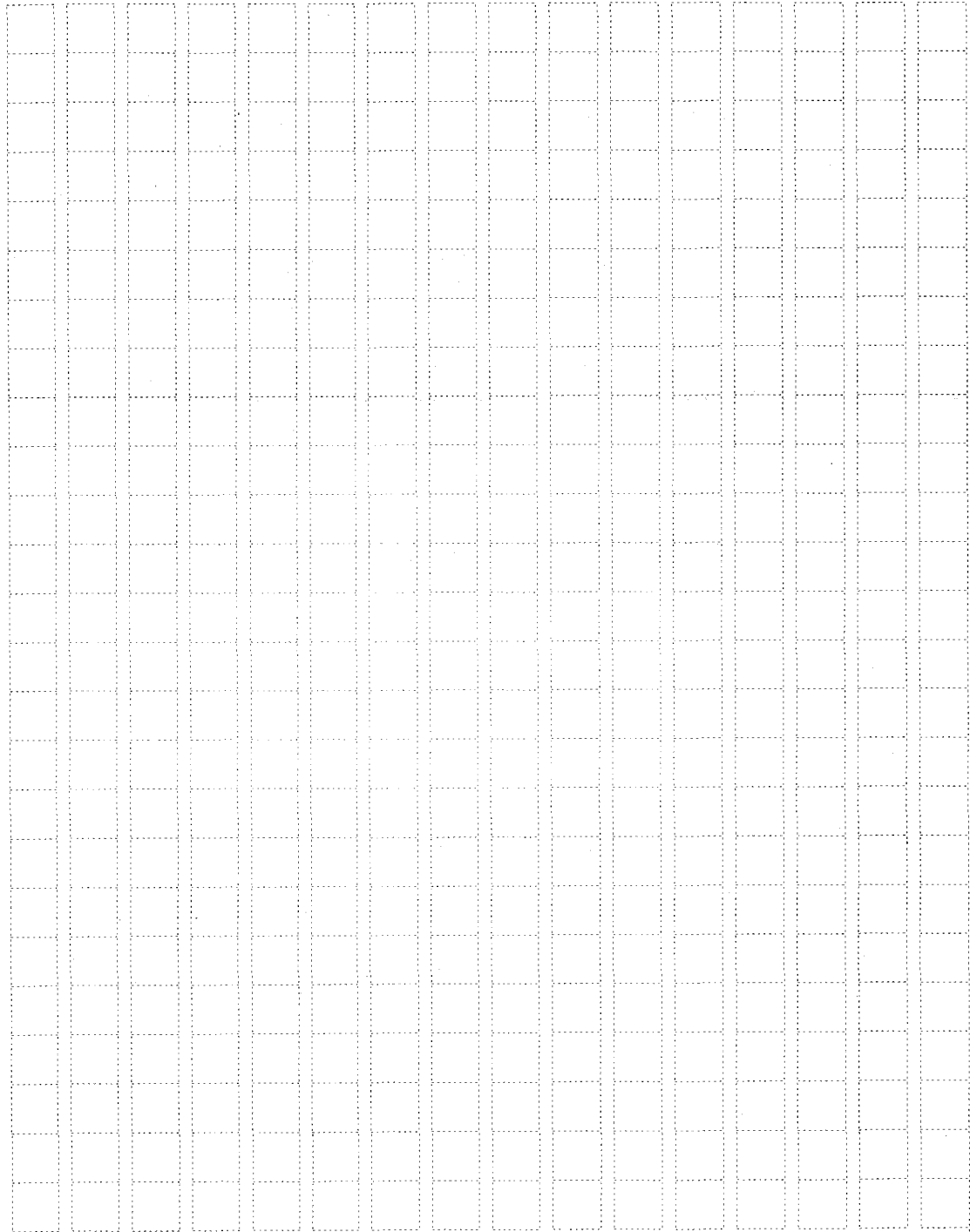
指摘されていゝ。私見では、これはキリスト教信  
 仰告白、模索日記である。  
 W. ジェイムスは神秘的形而上学、その啓示につ  
 いて次のように述べる。「私たちが合理的意識と  
 呼んでいゝ意識は、意識の一特殊型にすぎない  
 のであつて、この意識のまわりをぐるるとりま  
 き、きわめて薄い膜でそれと隔てられて、それと  
 はまつたく違った潜在的な形態の意識の意識  
 がある。この普通のとは別の形の意識をまつ  
 たく無視するよゝな宇宙全体の説明は、終局的な  
 説明ではありえない。そしてこの膜を克服する  
 のが神秘主義の功績だと言ひ、更には「信仰状態  
 と神秘的状態とは実際には変換のできる二つの言  
 葉である。」と述べべている。(「諸相」第十  
 六・十七講 194、244、251p.)  
 この第十六・十七講で興味深い例に出会う。す

著わした」とともに一言したい。独歩が教えを受け世話になつたことのある内村鑑三に「偉人はすべて預言者と呼ばるべき」であつたが「代表的日本人」を著わしたことがうなづける。独歩にしても同様である。だから歴史をしばしは口にし、偉人伝を残したのも同じ理由からである。歴史の生成過程をよく知ることそのものが宗教発生発展の姿——神の實在を感知し目覚めることである。あり、個人の伝記は苦難をも含めてその個々の部分々々のありわれである故、「欺がざるの記」につけられた副題ばかり「事実——感情——思想史」をさぐることは彼にとって必然的関心である。そして、個人の運命は實在的、他者との関係にほかならず、独歩は運命に関心を持たずにはいられなかつた。「運命」に収められた「運命論者」がその顕著な例、むしろ極端な例で

(9)  
明治三十八年十月。この時の書簡で独歩は、「牛肉と馬鈴薯」に対して未だ何人からも得心のいく批評を与えられたことがないと言え、梁川の「驚異と宗教」こそ自分の心靈の経験と符合すると考へる旨を記している。「全集第五卷」  
続いて独歩の第三小説集「運命」が明治三十九年三月に刊行されるが、彼が何故運命に関心を持ったかを彼がよく口にした偉人、英雄、哲人へ「これらと詩人とを同列に並べてしばしば書きつけた」歴史、伝記（偉人の伝記を数冊新聞記者時代にあげているが、一方R・オットーは「私たちの身体を動かす意志の力」は「器械的作用を引起す精神的、原因の能力にほかならない。この事は確かにかに全く不可解な謎であつて、私たちが不思議と思われないのは、それに馴れていからである。」と言つていゝる。「聖なるもの」に「附属論文 295 p.」）

(13) (12)  
 形而上学的な解決があるにちがいない。、、、、  
 あるはずがない。何か神秘が隠されているのだ、  
 えるのは間違っているのだ。実在しないものなど  
 を受ける人間がある。ものごとがよそよそしく見  
 ている。このようなことに、心から深い驚き  
 度まで不調和に対して敏感になれるか、にかがっ  
 へ宗教の問題はまったく、人間の魂がどの程  
 諸相(F)第十四・十五講123P。  
 であることがわかるのである。  
 たがったもので、信仰の真の妥当性を求めるもの  
 ーに思いを寄せる独歩の煩悶が「良心」の声にし  
 は述べるが(168-170P)、「この観点からはルタ  
 人間を襲撃するあの恐ろしい瞬間」それがルタ  
 要素の響きだが、「あたかも悪魔自身のようにな  
 るこの「宗教的畏怖」のはなほだしく非合理的

(11) (10)  
 聖なるもの」第十四章162、171P。ルターにおけ  
 いる。、  
 資料叢書 自然主義文学」有精堂 所収に拠って  
 昭和四十七年三月。但しここでは「日本文学研究  
 勝」小説家の誕生——国木田独歩論の試み(一)——  
 ような当代キリスト教の体質の変化、(佐藤  
 睡眠中のゼイタクと化していったこと、この  
 分、もしくは社会の知的な部分による「遊戯」  
 宗教であることをやめて社会の上層および中層部  
 当代キリスト教が次第に全人間的、全人格的な  
 七十年」のじある。  
 前々んなことはおくびにも出さなかつたへ「故郷  
 が回想する如く「出生問題は伝説めいた噂」で生  
 して運命を思うのはごく当然のこと、柳田国男  
 もあるが、それとは全く関係なく宗教の人独歩と  
 そこ、ここに独歩の出生問題の謎を持ち込め論者



(14)

啓示の意味が恐しいものであったりする悪魔的な  
 神秘主義も、高い神秘主義も同一の精神的水準す  
 る。この領域にはありゆる種類のもの、「天使と  
 蛇」が住んでいる、とW・ジェームスは言う。(一  
 「諸相」(F)第十六・十七講 255 P.)  
 213 P. 231 P.)  
 ごく些細なことを大変重要な出来事と考えたたり、  
 足を見出し出すにいたる(「諸相」(上)第六・七講  
 に、しばしば、宗教による解決にはじめて満  
 いう切実な驚異の念と疑問が起こり、ついでに





い事や友の上を考へだす。其時油然として僕の心に  
 浮かんで来るのは則ち此等の人々である。さうでない  
 此等の人々を見た時の周囲の光景の裡に立つ此等の  
 人々である。我と他と何の相違があるか、皆是れ此  
 生を天の一方地の一角に享けて悠々たる行路を辿り、  
 相携へて無窮の天に帰る者ではないか、といふやう  
 な感が心の底から起つて来て我知らず涙が頬をつた  
 うことがある。其時は実に我もなれば他もない、  
 ただ誰れも彼も懐かしくつて忍ばれて来る、  
 僕はその時ほど心の平穏を感じることがはない、其時  
 ほど自由を感じることがはない、其時ほど名利競争の  
 俗念消えて総ての物に対する同情の念の深い時はな  
 い。  
 僕はどうにかして此題目で僕の思ふ存分に書いて  
 見たいと思ふてゐる。僕は天下必ず同感の士あるこ  
 とを信ずる。

第三 独歩の悲哀感と宗教  
 もう止そう、余り更けるから。未だ幾らもある。  
 北海道歌志内の鉦夫、大連湾頭の青年漁夫、番匠川  
 の瘤ある舟子など僕が一々此原稿にある丈けを詳し  
 く話すなら夜が明けて了まうよ。兎に角、僕がなぜ  
 此等の人々を忘るゝことが出来ないかといふ、それ  
 は憶ひ起すからである。なぜ僕が憶ひ起すだらうか。  
 僕はそれを君に話してみたいがね。  
 要するに僕は絶えず人生の問題に苦しんでゐながら  
 ら又た自己将来の大望に圧せられて自分で苦しんで  
 みる不幸な男である。  
 ところで僕は今夜のやうな晩に独り夜更て燈に向つ  
 てゐると此生の孤立を感じて堪え難いほどの哀情を  
 催ふして来る。その時僕の主我の角がぼきり折れて  
 了つて、何んだか人懐かしくなつて来る。色々の古

却つて「自由」や「同情」と結びつくのは何故だろうか。またそれは何故「自我」の放棄を介在しているのだろうか。欺かざるの記で彼は悲哀を二つに分けている。「夫れ悲哀にニツあり、一は「我」より出で一は「神」より来る、「我」より出づる者之れ毒泉なり、飲む者は悶死し、「神」より来る者は、心の清き者に非らざれば聞く能はず、（明治二十六年二月二十三日）。「されど吾、神の愛、永生の信仰、哲人の生涯などを思ふて無限の悲哀を追払ひたり。」（明治二十八年九月二十一日）。

さて今ここで独歩の一種の「回心」の声をきいてみた

い。

自分が小説家であるか、無いか、先づ第一の問題です、全体自分功名心が猛烈な少年で在り

其後二年経過つた。

（「忘れえぬ人々」 明治三十一年四月）

君は曾て、旅して遠く笛の音を聞きしことありと言ひたまひぬ。余も亦たこれを聞きぬ、而して今夜に等しき哀感に打たれぬ。この如きは其他に数々余の経験せしところ。あゝ余が存在の不思議にまじひつとも猶ほ僅に堪へ忍び得るは全く此哀感の故のみなり。時の羽風耳邊を掠めて飛び、此生の泡沫の如く、人類の運命の遂に果敢を感じて消魂する時も、僅に此哀感の力にて我心は幽ながらも永遠の命の俤に触れ得るなり。

（「悪魔」）

ここに述べられた悲哀感が、悲観、厭世につながらず

らうかと思つた事もありました。

(「我は如何にして小説家となりしか」明治四〇  
年一月)

ここには、人格のエネルギーの中心が移動するといふ回  
心の様子が鮮やかにかつ率直に語られていると思ふ。最  
晩年の談話筆記においても「基督教の根本精神と云ふも  
のとはどうしても離れ得ない」と述べ(2)、かつての洗礼  
主植村正久について「余の心の合鍵は渠の手にあり」と  
述べた(十九頁参照)。他にも日曜には教会に行かない  
と命がもたないとか(上述三十七頁注(4))、「欺かざる  
の記」明治二十九年十月前後には文学者が伝道家かとい  
う自分の岐路を記している。(3) 以上から推すに、独歩  
は自然に對してある實在を介さずには見られなかつたと  
思われる。そして少くとも人格的なものを指向してはい  
たであらう。(4) 「欺かざるの記」の早い時期には注目

まして、如何にして我れは世界第一の大人と成  
るべきやと言ふ問題に觸着つてぼろ／＼涙をこぼし  
た事さへ有るのです。つまり文章家、小説家  
など言ふものは絶対に眼中に無かつたのです、処が  
自分の精神上に一大革命が起りました。即ち、人性  
の問題に觸着たので有りませす、謂ゆる「我は何処よ  
り来たりし」。「我は何処に行く」。「我は何ぞや  
(What am I?)」との問題に觸れたので有りませす、  
其で如何にしてかゝる問題に觸れたかと言ふ事は、  
此処で申し上げる場合には有りませんから止します  
が、何しる結果は則ち精神上の大革命でありまして、  
斯うなると、自分は哲学と宗教との縁を離る  
る事ができなくなり、基督教にて示されし宇宙観、  
人生観などが寝ても覚めても自分を或は悩まし惑は  
慰め、それに心を奪はれて實際の事は殆ど手にもつ  
かぬ場合もありましたし、自然、自分は宗教家にな

あらずや。悲哀は其れ自らが一半の救いなり。全く神を  
 見ざるものに悲哀あるべからず。と述べている。また  
 新渡戸稲造の「悲哀の使命」は、「キリストは悲しみの  
 人であり（聖書にそのように記されている）、キリスト  
 教は悲哀の宗教」で、「悲哀の人々に偉大な慰藉を与える  
 と説き、更に「物質界と精神界との間には食い違いがあ  
 る。そこに悲哀も湧けば不満も起る。、、たしかな  
 靈魂は、、悲哀を消すことができない。と述べる。  
 やはり「不調和」に對してどこまで敏感になれるかが問  
 題の根本なのである。ほかにも「この悲哀が悪魔より来  
 たか、神より来たか断じ得ない者は、いつまでも地獄に  
 迷っているほかない。と、同情は悲哀の表顯であ  
 る。と、いう注目すべきことばが見えるのである。  
 独歩の場合にも、「悲哀さえも造り給うたお方と、た  
 だ二人だけで立っていた」(5)とまでは言えないだろうが  
 それに近い感じ、消極的な非實在の感じから積極的な直

永劫の初めより窈かに悲哀そのもの、中に置かれたるに  
 無類の感情」と呼び、「悲哀を超越する解脱の鍵は世の  
 も極めて旺盛なる、朧げなれども極めて光輝ある、一種  
 三十八年四月）中の「悲哀の秘義」では、「漠然たれど  
 独歩の悲哀二種に對応している。また「心響録」(明治  
 そは寧ろ無限者慕はしみの悲哀なり」と述べているが、  
 の悲哀は必ずしも虚無寂滅を感じる消極的悲哀にあらず、  
 年一月）の中で「悲哀は實に人生の根調なり。、、こ  
 をなしている。網島梁川は「悲哀の高調」(明治三十五  
 一月一日)・云々。  
 さて悲哀は宗教的経験、活動において重要なはたらき  
 生涯の賜として余に示し給ふ様なりぬ。と、(二十六年十  
 て止まざる故に、神は次第に其の衣——自然の美を余が  
 せず、(明治二十六年十月十四日)「余は大に求め  
 きは上帝と上帝の法則あるのみ。自ら失ふて以て自ら死  
 すべき言葉がいくつもある。「乾下坤土、恐れて敬す可

おける永遠性の内在を感じ得た時にあらわれ、くるので  
 ある。「忘れぬ人々」に仏教的無常観やものあはれ  
 をのみ見ることはできない。そもそもものあはれが宗  
 教的機縁でなくて何であらう。更に独歩には上述のよう  
 にある超過が見い出せるのである。(8)

接に感受される準感覚的な實在へと踏み出していよう。  
 そして驚異心が自己放棄を促すものであったように(6)悲  
 哀の場合にも自我の感情が消え「他の吾」へ独歩の発  
 見、人類への同情へ進んでゆく。まず人生を全く自然主  
 義的に眺める見方——人間の魂にしてもしありうるとし  
 て——は不可知論などの悲哀に必ずおち込む。これが第  
 一の悲哀で、宇宙人生の合理的な意味を見い出せない  
 ことの重荷のようなものである。非合理的な感情あるいは  
 信仰が無限なものをもち込まない限り、有限な生命の中  
 にとどまっただけの限り、いつまでたっても0110・人生  
 は無意味である(7)と言わざるをえない。  
 第二の悲哀は、悲しみを克服する何か、「人々がそれ  
 によつて生きるところのもの」(トルストイ)を求め、  
 が故に起こるところのそれである。何か高い力の支配を  
 感じつつその所有、被所有を求め続けること自体の中に  
 悲哀を味わう。自由とはこの時、すなわち有限性の中に

(7) 「諸相」(上)第八講 299 P. しかしなおかつ「事物の絶対的全体と宗教的に和解する」ということとは不可能であるかもしれない。という闇が残るとして、可能であるかもしれない。という闇が残るとして、(8) いわば「過ぎゆくものとして、跪き、不滅のものとして起ちあがる」願いである。「諸相」(F)第十・十七講 208 P. の引用文中。

注 (1) 「諸相」(上)第九講 特に 297 P. を参照されたい。  
 (2) 「病榻雑話」明治四十年三月。  
 (3) 回心の恒久性について「諸相」(上)第十講 386 P.  
 (F) 第十一・十二・十三講 25 P. を、回心者が必然的に伝道におもむくことは「聖なるもの」附属論 文 282 P. 302 P. の「召命」「任職」体験がそれぞれ参考になる。  
 (4) 「人格主義も神秘主義を本質的契機として包含する」ことによつて、はじめ宗教性を維持し得る」(波多野精一「宗教哲学」第三章)  
 (5) 「諸相」(上)第三講 103 P. に引かれた手記。  
 (6) このことは例えは「諸相」(上)の「このようにして、情愛が支配するに物を一様にしようとする心の状態であつて、そこでは、利己心が消滅して、」  
 (7) 「諸相」(上)第八講 299 P. しかしなおかつ「事物の絶対的全体と宗教的に和解する」ということとは不可能であるかもしれない。という闇が残るとして、(8) いわば「過ぎゆくものとして、跪き、不滅のものとして起ちあがる」願いである。「諸相」(F)第十・十七講 208 P. の引用文中。

四・独歩の「詩」



更に、「不可思議なる大自然（ワーリヅワリスの自然主義と余）では次のように述べている。

しかし徳川文学の感化も受けず、紅露二氏の影響も受けず、従来の我文壇とは殆んど全く没関係の着想、取扱、作風を以て余が製作も初めた事に就ては必ず其本源がなくてはならぬ。余はワーリヅワリスに想到したのである。

事実中の大事実当面の真現象に就ては何等の感想をも懐かない文人が如何に巧みに人間の事実を直写したからとてそれは一芸当たるに過ぎない。斯くて文芸何の値ぞ、所謂自然主義何の値ぞ。

（明治四十年二月）

これは早く「欺かざるの記」に見える文学者イコイル人間の教師という彼の考えと一致する。「昨日吾断然文学を以て世に立たんことを決したり。則ち人間の教師

第四 独歩の「詩」

独歩は、明治二十九年に執筆したと推定されている。遺稿「文学者——余の天職」において、「要するに文学は到底、懐疑者のかくれ場処のみ」。「断然宣教の職に従事し能はざるを悲しむ」と述べる。また、晩年には、先の「我は如何にして小説家となりしか」の終りの部分でこう述べている。

又た自分の作物は自分の心真に感得し得たるを正直に書いたもので、それが文芸の光輝を幾分か發揮し得ているといふ自信及び満足も持て居ます。

たゞ自分は、人生の問題に煩悶した当時の我から全く離れてたゞ文芸の爲めに文芸に埋れ度くありません。「人生の研究の結果の報告」と云ふ覚悟は何処までも持て居たいのです。

の記しにみることにする。余の眼には歴史的事実のみ  
 事実として映ぜざる也。理想も事実なり。想像も事実な  
 り。人間が其の心に働かす事実なり。天地間のこと事実  
 ならぬはなし、事実とは大なる言葉として余に響く。  
 (明治二十六年十一月九日) 一方でこの前後の記事には  
 「一ツの神と凡ての人!」など、神を痛切に求める声  
 散見される。彼の作品にはその根底に、いわゆる現  
 実や史実を無邪気に語るのではなく、むしろ彼の信じた  
 事実――神秘的体験や宗教的想像を教えようとする願  
 いを蔵していることがあきらかである。人間の教師  
 として「研究の結果の報告」だと言っているのである。独歩に  
 とつて「あらゆる経験的事実は等しく不完全」で、「事  
 実に意味を与へるものが事実を超越したものであり、  
 経験的事実はこの回想の機縁」(2)で、あるとするに  
 「源おち」を嚆矢とする独歩の「物語り」は生れてくる

として吾が力に能ふだけ務めて此の世を終ることは最も  
 吾が命運に適し、吾が生を値するを信じたり。(明治  
 二十六年三月二十一日) 同日の終りの方にはこうも記  
 されている。森羅万象の「声」を聴て之れを教へん  
 事を希望す。諸の哲人詩人より之れを聞く可し、現実の  
 目撃より之を聞く可し。北村透谷の詩人論と  
 一脈通じ合う。透谷曰く、「万物自ら声あり」皆な或  
 る一種の声を放ちつゝあるにあらざるや。「造化」の部  
 分部分は「一として宇宙の大調和の為に動くところの小  
 調和にあらざるはなし。」(2)これに対し、「独歩吟」の  
 序で、「歌はざるを得ざる情熱に駆られて歌う時に、  
 瞑々のうちに必ず節あり、調あり、詠嘆ありて自から詩  
 的発言を成す」とも言つた独歩である。(明治三十年二  
 月) 独歩にとつて「事実」とは何かを「欺かざる

事件之れ自身が如何に面白く思はれても、之れを直  
 ちに筆に上すのは真の詩を得るの道に非ず。必ず之  
 れを心底最も深き処に蔵して其醜醜を待たざる可か  
 らず。然からざれば其詳細の事實は忘却し易いから  
 写生文とは縁が益々遠くならんも、人生の真に触れ  
 たる詩を得ること、於て誤は此外にあるまじと思ふ。  
 (予が作品と事實) 明治四十年九月)

それでは、詩や詩人を彼はどう考えていたかを、再び  
 欺かざるの記しによつて確かめておきたい。次のよう  
 ものである。「習慣の昏睡より人心を醒起し、吾人を困  
 む此世界の驚く可く愛す可きを知らしむるこそ、詩  
 目的なれ。更らに一步すすめて言へば人をして自らを  
 此驚く可き世界の中に見出さしめ神の真の中に人生の意  
 義を發明せしむるこそ、詩人としての目的なれ。」(明治  
 二十六年十月十三日) 「詩はイマジネーションとシンパ

のだとわたりしは考ふる。しかも、これが独歩の詩であり  
 彼の信じた「事実」である限り、物語りの捏造とは違  
 う。それが独歩の論理である。彼が唯物主義を厭悪したの  
 はよく知られてゐるが、それは近代的世界観に異を唱え  
 る。先づ「悟性とは違ふ認識領域の存在を主張するが故であ  
 る。先に引いた「独歩吟」序ではこんなふうになつてい  
 る。「基督教を始め、欧州の人心を鼓舞激励しつつある  
 雄大の理想、早く已に吾国に入り来りて而も日本には、  
 これが熱情を享け得る程の詩歌を欠きしため、我国の新文  
 明は物質的偏長の弊に陥り、世を挙げて唯物主義の浅薄  
 固陋に走り、宗教は卑下せられ、徒に電気灯のみ輝きて  
 国民靈性の神殿は暗夜の如し。」  
 さて独歩は自分の作品を全て「詩」と呼ぶ傾向があつ  
 た。次の如くである。「要するに余の経験に依ると、實在の人物、實際の

いた小説でさえ、その中に「天地の痕跡をさぐること」  
 (5)がすなわち彼の「詩」であった。日本自然主義文学の  
 先駆とされるこれらの作品は、いわゆる自然主義的では  
 ないと考える。依然として、現実と理想の織りまざり方  
 の神秘さを感じ得しようにしているし、人間の考えた秩序  
 無秩序というもので世界を眺めてはいない。「万物を神  
 のなかに見、そして万物を神に關係づけるとま、日常茶  
 飯事のなかに、意味の表現を読む」(6)態度で書かれ  
 ているのである。

爾来数年、志村は故ありて中学校を退いて村落に  
 帰り、自分は国を去って東京に遊学することとなり、  
 いつしか二人の間には音信もなくなつて、忽ち又四  
 五年経つてしまつた。

刃が自分が二十の時であつた、久しぶりで故郷の

ツシトが生む刃の子なり。(同上十一月二十八日)  
 「哀想幽思交々起り、人生に驚異すること益々深くして、  
 われ愈々詩人たらんことを願ふ也。神よ、此の吾  
 に此詩情を与へ給ふことを感謝す。われは詩人と  
 して此の生涯を神と人とに捧げん。(二十九年十二月  
 二十三日)まだたぐさんの例をあげることが出来る  
 が、以上のような彼の理想が先に引いた晩年の随想文  
 とよく響き合つて、その間がわかるのである。この間の消  
 息を芥川龍之介は、「彼の詩はもつと切迫してゐる。：  
 、いっつも高峯の雲よ」と呼びかけてゐた。彼の  
 中の詩人はいつまでたつても詩人だつた。独歩だけ  
 は時々空中へ舞上つてゐる」などと言つてゐるのである。  
 (4)したがつて独歩最晩年の作品「疲労」(明治四十年六  
 月)「窮死」(同上)「竹の木戸」(明治四十一年一月)  
 「ニ老人」(同上)という市井の平凡人の不幸や悪を描

柄谷行人前掲書)が、舌足らずな作品ではあるが却って  
 ト教に出会ったことで、知覚の様態が変わったことへ  
 自らに問うているのである。画の悲みに、キリス  
 程前に書き取っていた「忘れえぬ人々の意味と由来を  
 とは、主人公の分身の死にほかならない。作者は四半  
 志村少年にどんなモデルが実在しようとも勿、彼の死  
 るう。のでないことは、引用部分を読んだだけでも明らかであ  
 解ける。――なのだが、その死を悲しんで泣いている  
 主人公の方は持つていたが、校内展覧会の日を境にそれが  
 時代から親友――はじめはライバルとして暗に敵愾心を  
 これは作品の結末部で、志村とは図画にまつわる小学校  
 (「画の悲み」明治三十五年八月)  
 日に輝いて眩ゆきばかりの景色。自分は思はず泣い  
 た。

村落に帰った。宅の物置に曾て自分が持っていた画  
 板が有ったの(を)見つけ、同時に志村のことを思  
 ひ出したので、早速人に聞いて見ると、驚くまいこ  
 とか、彼は十七の歳病死したとのことである。  
 自分は久しぶりで画板と鉛筆を提げて家を出た。  
 故郷の風景は旧の通りである。然し自分は最早以前  
 の少年ではない、自分はたゞ幾歳かの年を増したば  
 かりではなく、幸か不幸か、人生の問題になやまさ  
 れ、生死の問題に深入りし、等しく自然に対しても  
 以前の心には全く趣を変へて居たのである。言ひ難  
 き暗愁は暫時も自分を安めない。  
 時は夏の最中自分もたゞ画板を提げたといふほか  
 り、何を書いて見る気にもならん、独りぶらぶらと  
 野末に出た。曾て志村と共に能く写生に出た野末に  
 闇にも飲びあり、光にも悲あり、麦藁帽の廂を傾け  
 て、彼方の丘、此方の林を望めば、まじりと照る

無邪気なる心に「哀しき変化」(遺稿「画」)がおこ  
 ったところ、独歩の文学を育む契機があったこと以上  
 のとありである。独歩の文学を育む契機があったこと以上  
 最後、今後の課題について述べておきたい。まず各  
 作品論に踏み込めなかつたことが最大の課題として残つ  
 た。その際、今回触れた作品は無論、触れえなかつた「  
 武蔵野」空知川の岸辺など、どのように位置づけける  
 のかが問題となる。殊にこの両作品にあらわれた「自然  
 が難問である」とわたしは思う。この両作品にあらわれ  
 次いで、ワーズワース、カークライル等からの影響の検  
 討をあげたい。世上言われるワーズワースよりもカーク  
 イルが、独歩の信仰心にとつて重要性を持つのではない  
 かと現在思っているが、ワーズワースについてはい、自  
 然界の預言者といいう長文のワーズワース論を書いた植

よく露呈している。それまで意味がなかつたものが急に  
 意味深く思われ、くるのである。「忘れえぬ人々」の結  
 末にしても、それまで述べてきた、風景の一部としての  
 人間を発見した眼でもつて、宿屋の主人という「常民」  
 (柳田国男)を発見しているのである。  
 其後二年経過した。  
 大津は故あつて東北の或地方に住つてゐた。  
 机の上には二年前秋山に示した原稿と同じの「忘れ  
 得ぬ人々」が置いてあつて、其最後に書き加へてあ  
 ったのは「亀屋の主人」であつた。  
 「秋山」ではなかつた。  
 彼の「詩」とは、「画の悲み」にほかならぬ。先に一部  
 引いた芥川龍之介の短文が追悼文のような調子を帯びて  
 いるのもそのためである。独歩のことばを借りると、「

Blank grid for writing on page 77.

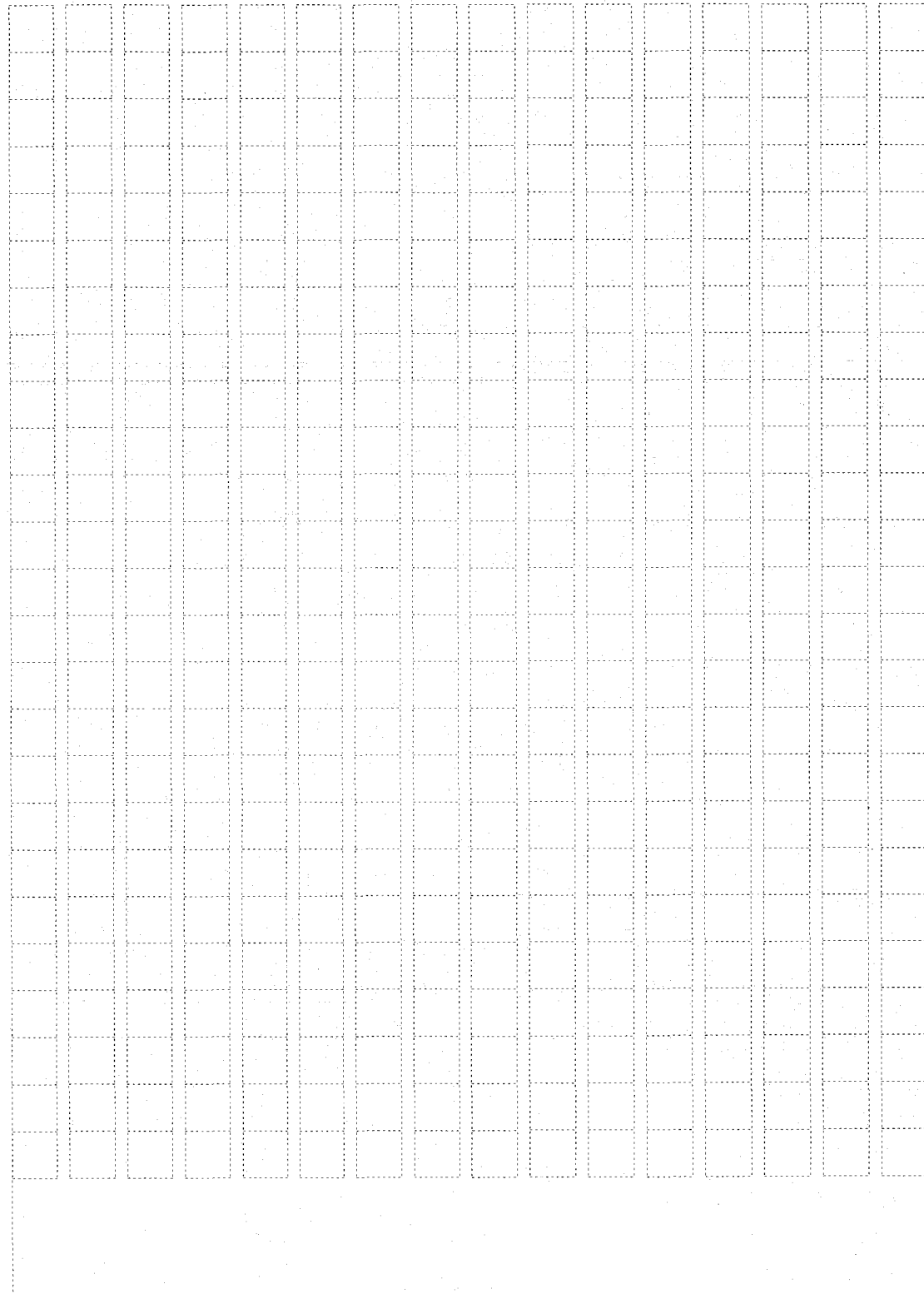
Handwritten text on page 76:
村正久から最初に教えられた可能性があり、ワーズワース体験は必ずしもキリスト教信仰と矛盾するわけではな
い。だが独歩自身ワーズワースとの食いだいを感じている
た可能性があり「欺がざるの記」(参照) それが無端
友一氏の言うように「キリスト教の伝統の中に育った汎
神論者と東洋的かつ仏教的精神風土の中で誕生したキリ
スト教徒との人間構造の相違」(「文学界とその時代」
下巻)などと言えるところ、独歩が汎神論や自然絶対
主義へ傾く原因の一つがここにあることになる。複雑な
問題であり、わたしにとって全て今後の課題である。



(4) 芥川龍之介「文芸的な、余りに文芸的な」(昭  
和二年二月と七月)中の「国木田独歩」その  
注目すべき部分を書き抜いてみる。「しかし独  
歩の「無器用」と云はれたのは全然理由のなか  
つた訣ではない。彼は所謂戯曲的に発展する話  
を書かなかつた。のみならず長ながとも書かな  
かつた。(勿論どちらも出来なかつたのである  
)彼の受けた「無器用」の言葉はおのづからそ  
こに生じたのであらう。が、彼の天才は或は彼  
の天才の一部は実にそこに存してゐた。「鋭  
い頭脳」とともに「柔い心臓を持つてゐた独歩  
は勿論おのづから詩人だつた。(と云ふ意味は  
必ずしも詩を書いてゐたと云ふことではない。)  
しかも島崎藤村氏や田山花袋氏と異なる詩人だつ  
た。彼の詩はもつと切迫してゐる。独歩  
は彼の詩の一篇の通り、いつも「高峯の雲よ」

(3) 波多野精一「宗教哲学の本質及其根本問題」第  
二章。大正九年十一月  
ろである。論者によつてそれれ別れるとこ  
と相違点は、方で類似してゐるとされる両者の思想の共通点  
言つてもよい。また、キリスト教とのかかわり  
透谷と独歩の影響関係はその確証事実がないと  
いる。大なる詩たるを知らざるなり。と論をすすめて  
に悟入すること能はざるものは、未だ以て天地の  
而して之に恋着するを知つて、彼の大一致、  
り、多くの不一致の中の一不一致を取り、  
一致を觀て後に多くの不一致を觀ず、之れ詩人な  
「万物の声と詩人」明治二十六年十月、この  
健蔵)昭和五十三年三月増訂版。  
注(1) 学習研究社定本国木田独歩全集第九卷解題(中島





と呼びかけてゐた。『武蔵野』はその名前通り、確かに平原に違ひなかつた。しかしまたその雑木林は山々を透かしてゐるのに違ひなかつた。『自然主義の作家たちは皆精進して歩いて行った。が唯一人独歩だけは時々空中へ舞ひ上つてゐる。』

(5) 国木田独歩『牛肉と馬鈴薯・酒中日記』新潮文庫  
 (昭和四十五年五月)の中村光夫氏解説。

(6) 『諸相』(F)第十九講 324 p.

(7) 学習研究社定本国木田独歩全集第二巻 解題参照。

総注(一) 「聖なるもの」原著の刊行は一九一七年である。

同じく、「宗教的経験の諸相」は一九〇一年と二

年である。両著はデュルケムデュルケムの「宗教生活の原

初形態」(一九一二年)とともにしばしば宗教学

上の三大古典とされることがある。

(二) 植村正久は「オットー」聖なるもの」について波

多野精一に質問し、「波多野はこの時綿密に答えこ

れを高く評価したそうである。(波多野精一全集

第三巻月報の山谷者吾の文章による。)なお、波

多野氏は植村氏によって明治三十四年頃洗礼を受

けた。

昭和38年3月角川書店	近代文学鑑賞講座第七卷国木田独歩 中島健蔵編著	昭和36年6月岩波書店	座談会明治文学史 柳田泉・勝本清一郎・猪野謙二編	年11月法政大学出版局	黙移——明治・大正文学史回想 相馬黒光著 昭和36	月明治書院	「文学界」とその時代 下巻笹淵友一著 昭和35年1	国男全集 昭和37/46年筑摩書房別巻3所収によつた	故郷七十年 柳田国男著 昭和34年11月 定本柳田	昭和33年1月東京堂出版	自然主義の研究 上、下吉田精一著 昭和30年11月	房	国木田独歩の生涯 福田清人著 昭和27年7月河出書	昭和44年6月有精堂によつた	国木田独歩 坂本浩著 昭和17年11月 国木田独歩
-------------	----------------------------	-------------	-----------------------------	-------------	---------------------------------	-------	---------------------------------	-------------------------------	------------------------------------	--------------	---------------------------------	---	---------------------------------	----------------	------------------------------------

一全集 第四卷昭和44年1月岩波書店所収によつた	宗教哲学 波多野精一著 昭和10年4月 波多野精	波書店所収によつた	年11月 波多野精一全集 第三卷 昭和43年12月岩	宗教哲学の本質及其根本問題 波多野精一著 大正9	三十年 昭和56年5月岩波文庫によつた	東京の三十年 田山花袋著 大正6年6月 東京の	人生雑感 昭和58年8月講談社学術文庫によつた	人生雑感 新渡戸稲造述国井通太郎編 大正4年 基督	教の起源他一編 昭和54年6月岩波文庫によつた	基督教の起源 波多野精一著 明治41年8月 基督	学習研究社	定本国木田独歩全集 全十巻及び別巻 昭和53年3月	参考文献覧
-----------------------------	-----------------------------------	-----------	-------------------------------------	--------------------------------	------------------------	----------------------------------	----------------------------	------------------------------------	----------------------------	-----------------------------------	-------	---------------------------------	-------

「 早稲田時代の独歩」 中桐確太郎 「 教会時代の独歩」	よつた	田独歩号 (前記) 植村正久 定本 国木田独歩全集 第十卷所収に	「 第五卷 大正10年12月 春秋社所収によつた」	「 神秘と宗教」 明治39年4月 網島梁川 (梁川全集)	「 驚異と宗教」 明治38年5月 予が見神の実験 同前	「 悲哀の高調」 明治35年11月 心響録 明治38年2月	「 谷全集」 第二卷所収によつた	「 万物の声と詩人」 北村透谷 明治26年10月 (前記) 透	「 宗教学辞典」 小口偉一・堀一郎監修 昭和48年12月東	「 京大学出版会」	「 透谷全集」 第二、三卷 昭和25年岩波書店
--	-----	---	------------------------------------	---------------------------------------	---	---	------------------------	---	--	--------------	----------------------------------

「 植村正久文集」 斎藤勇編 昭和14年8月岩波文庫	「 年9月改版 岩波文庫」	「 71ズワ1ス詩集」 田部重治選訳 昭和13年9月 41	「 56年1月 桜楓社」	「 国木田独歩」 忘れぬ人々 論他 北野昭彦著 昭和	「 社」	「 日本近代文学の起源」 柄谷行人著 昭和55年8月講談	「 郎訳 昭和44年10月 昭和45年2月 岩波書店」	「 宗教的経験の諸相」 上、下 W・ジエイムス著 枡田啓三	「 6月 桜楓社」	「 近代文学者」 キリスト教思想 辻橋三郎著 昭和44年	「 月岩波文庫」	「 聖なるもの」 R・オットー著 山谷省吾訳 昭和43年12	「 明治の作家」 猪野謙二著 昭和41年11月 岩波書店	「 明治文学史」 中村光夫著 昭和38年8月 筑摩書房
-------------------------------------	---------------------	---	--------------------	---	---------	---------------------------------------	---	---	-----------------	--	-------------	--	--	---

義文学	昭和47年3月	小説家の誕生	出版文庫版	独歩 欺かざるの記	中村光夫解説	独歩 牛肉と馬鈴薯・酒中日記	独歩 河霧論	文学 所収によった	和33年12月	独歩序説	独歩 運命	文学研究資料刊行会編	7月	国木田独歩の詩料
所収によった	前記	国木田独歩論の試み	塩田良平解説	上、下		昭和中45年5月	山田博光		前記	欺かざるの記	昭和32年9月	昭和50年8月	日本文学研究資料叢書	詩料について
	日本文学研究資料叢書			昭和46年4月		新潮文庫	昭和43年8月		日本文学研究資料叢書	の思想	岩波文庫	有精堂所収	自然主義文学	益田道三
	自然主義	佐藤勝		同5月	潮		同前		自然主義	安住誠悦	塩田良平解説		日本	昭和31年

袋の研究	昭和30年9月	国木田独歩に及ぼしたワ	明治のポロテスタン	収によった	月	文芸的な	本柳田国男全集	国木田独歩小伝	国木田独歩論	所収によった	文豪国木田独歩	国木田君の	独歩	植村正久
	明治大正文学研究	ワ	思潮		芥川龍之介全集	余りに文芸的な	第二十三卷	柳田国男	片上天弦		前記	我	石丸紫水	信仰の人
	第一輯	ツ	仁戸田六三郎		第九卷	芥川龍之介	所収	昭和2年4月	明治43年1月		定本	徳富蘆花	大久保時代	独歩
	自然主義文学	の影	塩田良平		昭和50年	昭和2年5		前記	同前		国木田独歩全集	明治41年8月	吉江孤雁	田村江東
	花	響			岩波書店所			定			第十卷	趣味	前田木城	佐伯時代

子	林	「	「
昭	一	独	悪
和	郎	歩	魔
57	・	と	の
年	鈴	花	思
7	木	袋	想
月	秀	そ	」
「	子	の	山
国		時	田
文	「	代	博
学	国	と	光
解	木	文	
釈	田	学	昭
と	独	」	和
鑑	歩	「	47
賞	と	座	年
」	キ	談	3
独	リス	会	月
歩	ト	」	「
と	教	三	同
花	」	好	前
袋	鈴	行	」
	木	雄	
	秀	・	
	小	小	